椿だより　１．私のこと。　　　　　　　　萩かなえ

気仙沼大島に暮らす、萩かなえです。はじめまして。

私は、半世紀と少し前に大島に生まれて、小学校中学校は島で、大島には高校はありませんから

高校は気仙沼市内の、県立の女子高校に通学しました。毎朝、旅客船フェリーで気仙沼に渡り、そのあとバスか、徒歩で通学しました。夕方は逆にフェリーの時間に縛られながら、島にもどります。今思うと、けっこうハードな、でも楽しい通学だったと思います。高卒後、進学のために上京しました。進学のため、というのは言い訳で、、本当は、大島、というより気仙沼から外に出たかったのです。知りたい事、やってみたい事がたくさんあり、日本中のいろんな人と知り合いたい、海外にも行ってみたい、その頃の私は好奇心でいっぱいでした。

私の父は、遠洋マグロ漁船で、漁労長、気仙沼的に言うと「船頭さん」をしていました。遠洋マグロ漁船は世界中の港に寄るので、大島の人間にしては、グローバルな考え方をしていたと思います。それで、ありがたい事に行きたかった東京に進学させてもらえました。

東京の専門学校を卒業後、そのまま東京で就職し、2016年の春、4年ほど前に、大島にUターン、戻ってきました。30余年、人生の半分以上は、東京で暮らしたことになります。

大島に帰ることを考え始めたのは、やはり東日本大震災がきっかけです。

あの日…、東京の揺れも大きかったですが、揺れが落ち着いてから勤務先のテレビで、見慣れた大島汽船さんのフェリーが、大きな津波に襲われ、岸壁から流されていくのを、呆然と見ていました。両親は…友人達は…避難しているだろうか…？もし船に乗ったまま流されてしまったら…どうなってしまうんだろう…。大島全部が津波にのまれてしまうかもしれない。そんな考えが頭の中でグルグル回っていました。

電話は、実家にも、友人にもまったく通じませんでした。すぐに駆け付けられないもどかしさは、なんとも言いようがないものでした。

奇跡的に、その日のうちに父に電話が通じ、一週間経ってからは母の無事も知り、ようやく緊張がほどけましたが、離れて暮らしている者にとっても、生きた心地のしない時間でした。

そして、不安と悲しみに沈む郷里の人たちのために、自分は何が出来るだろう…と考えましたが、すぐには思い浮かびませんでした。

数年の間、郷里に戻ること…がずっと頭の片隅にありましたが、大島に戻る気持ちが固まったのは、4年前、きわめて個人的な出来事が起きたからでした。その出来事については次に書きます。

　　　　　　　　　　　（著者は大島在住、大島の日常、変化を、写真とともに綴ってもらいます。）